

# クツパ戦記

鯉ふりかけ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

朝起きるとクツパ大魔王になっていた主人公。

今までのクツパの記憶を思い出そうとするとそこにはゲームでは語られなかった民や部下の幸福を願う君主としての姿があった。

クツパは何故いつもピーチ姫を拐うのか？

何故？侵略ばかり行うのか？

それを亀族の視点から書いて見ました。

w a r n i n g      w a r n i n g

この小説はゲーム内のわずかな情報からもしかしたらこういうのかも？を書いた内容です。

本家とは全く関係ないのでそれでも良ければ

# 目次

クツパ戦記	1
ブラツクキノコ王国	6
悪魔の謀略	11
進撃の髭悪魔	18
奴隸兵士とプロパガンダ	26
忠義と不死の軍勢	35
絶対邪竜戦線	40
隣人が化け物の皮を被された人間だった時の対処法	50

## クツパ戦記

ワガハイは亀族の王にして魔王  
クツパ大魔王である！

唐突に自己紹介を始めた訳だが  
朝起きるとワガハイはクツパになってた。  
ただそれだけである。

さすがに自分でもえっそれだけしか感じないの？と自分に対して  
突っ込みを入れたのだがどうやら元のクツパの意識が自分に混じっ  
ているらしい

まさに良くいえば豪快、悪くいえばおおぎっぱな性格になっている  
ようだ

さて、こうなってしまったからにはしょうがない前向きで建設的な  
思考していかなくては

まずは現状確認からだ

ワガハイはクツパ、立憲君主制のクツパ帝国の王であり軍の最高指  
揮官でもある。

また、この世界の悪の象徴でありマリオの宿敵でしょせんは倒され  
るべきラスボスである。

「……………マリオか」

赤帽子に髭の男とのこれまでを思い返すと出るわ出るわ

投げられ爆発させられ落とされ焼かれるとボッコボッコにされた  
苦い記憶がよみがえる

ここまではゲーム等で当たり前の流れなのだが、一つだけゲームで  
は語られなかったものがあつたのだ

なんとワガハイ、すべての記憶のなかに帝国や民や部下の幸せを  
願っていたのだ

「どういうことなのだ？」

クツパは作中では自己中心的であり自分の欲望のままにピーチ姫  
を拐う、キノコ王国や周辺諸国への侵略を繰り返す等の悪行をしてい  
る。

だがそれらはこの思いとは矛盾しているのだ  
なぜあのようなことをしたのか必死に思い出そうとするが思い出  
せない。

何故だ？

我は容姿に似這わず冴えた頭脳を持っている。

記憶の我が自分のためだけに無下に軍を動かし部下を危険にさら  
すとは思えないのだ

よくよく考えればワガハイ何回も侵略に失敗しているのだ。いく  
らワガハイが強くても失策を繰り返す指導者は人望を失うはずであ  
る。

何故？皆我についてくるのか……………

「何かあるな……………誰か！誰かおらぬのか！」

「どうされまぢたクツパ様？」

王座の間から叫ぶと扉が開き紫のローブを着たカメツクババが現  
れた

「おババか、ちょうどよい。我が国や周辺諸国の情報をすべて整理し  
てここに持て！カメツク達を総動員してもかまわん」

「かしこまりました」

カメツクババが退出したのを確認した後窓から我が国の景色を  
眺める。

乾燥した大地がどこまでも広がりドロドロとマグマが川のように  
流れ、遠方では大きな火山が噴火しているに見える。火山の噴煙が  
空を覆い昼間でも薄暗く城下の灯りは絶えることはない

それが綺麗だなと感じる同時に自分が変わったことを実感する。

そして、一つ重大なことに気づいた

……………あれ？我が国で農業無理じゃね

「なんと言うことだ！」

カメツク達がまとめた資料に目を通すにつれて頭が痛くなり同時

に怒りがこみ上げて来る。

おもわず炎を吐きそうになるがそれを抑えて情報を整理する。

まず、地理だ

この国があるのは緯度が高いところにあるらしく日照時間が少なく更に厳しい寒さに襲われるようだ。

確かにゲームでもラストステージの前は氷のステージを越えて行くパターンが多い

ワガハイ達は種族的にはカメに近似しているために寒ければ寒いほどに活動しにくい。

だがこの国は多くの火山とマグマが存在しているため気温は高く過ごしやすくなっているようだ。

次に産業

多くを占めるのは第二次産業のようだ

この国は鉱物資源が豊富らしく鉱山が多くあり火山の熱を利用した工業が盛んなようだ。鉄鋼や造船、兵器工廠等の軍関係のもの以外にも様々な生活用品が生産されている。だが、国内での生産量は魔法による水の供給に制限があるため細かく規定されている。

そして懸念していた農業なのだが……壊滅的である。

水は魔法によって生成できるが噴煙が日光を遮り土地も荒れている。わずかであるが火山性植物のファイアフラワーや香辛料の集団農場があるぐらいだ。

食料自給率は最悪の状態で長い間配給制度が続いている様子である。

では食料はどうしているのか？それは次の項目で語ろう

また、驚いたことにこの国。研究開発に重きをおいているようで予算が多く割り振られ。その成果が様々な技術が開発されている。

ゲームでもキノコ王国に無いような空中戦艦や大砲、戦車、動力が不明な空中要塞等明らかに技術が進んでいるのはわかっていたが………まともに国家運営してるなクツパ帝国

のはわかっていたが………まともに国家運営してるなクツパ帝国  
続いてだが目を通して怒りがわくのはここの部分だ

交易

一応だがキノコ王国や周辺諸国にも国交があるらしく貿易が行われているようだ。

だが、レートが酷い！ものすごく酷い！

キノコ王国からは農作物や木材を輸入してクツパ帝国からは機械や工業材料、薬品を輸出してる。

比率はキノコ100個に対して鉄インゴット300である。

暴利にも程がある!!

こちらは食料がなければ生きていけないので泣き寝入り状態で条件を飲んでる。

まさに「値段が高い？じゃあ買わなければいいじゃないですかw」状態。周辺諸国も大国のキノコ王国に習って同じようなレートを提示してくる始末

マリオのシリーズでもキノコ王国で飛行機や艦船、列車やレーサーカーが登場するが。一度も作っている工場や作業場を見たことがなかったがこのような理由があったのか……

当面の目標は食料だと思いつつ。

中央計画経済にすべての工場や施設が国営で集団農場とか経済がソビエトぽいな……：……：厳しい環境のなかで生きて行く上でこのような形態になったのかも知れないとつつこんでみて

そして、あれ？

クツパ国の長としては正しいことしてね？と思うようになり。

同時に食料確保のための植民地侵略・領土を荒らさないで活用するための首都強襲作戦（毎回ピーチ城を最初に襲撃する）・相手国の王族（ピーチ姫）との婚姻による併合計画・占領した領地への代官の派遣（各ワールドボス）

占領した領地の住民への危害をあまり加えないことといいゲームではおおよっぱにたてられた作戦に見えたが視点を変えて見れば実に合理的だと思う

加えてゲーム規模の軍をあれほどまでに運用しているのだバックには強力な家臣団が控えているはずである。

なかなか堅実な国家運営である。もしかしたらクツパはマリオと

バトルする以外は書類仕事してるんじゃないやと思うほどである。

だが、どうしてもマリオが邪魔である。

武力行使すれば正面から叩きのめされるし引きこもって何かしようとするほどこぞから情報が漏れて「クツパが何か企んでるの！」の告げ口がされマリオがここに攻めて来るし

というよりはあの髭の爺のどこにそんな力が？ 奴はただの配管工………待てよ！

確かに奴は配管工だ。現実では「へー」ですむが此処ではそうならない。奴が整備しているのはあの土管なのだからだ

土管と言えばあれだろA地点からB地点まで一瞬で行けるあれだろ………ワープ装置じゃないか！

えつちよと待って！ じゃああの爺は空間を繋げたりねじ曲げたりできるのか？

………なんだ、ただの化け物じゃないか

もしくは空間やその他もろもろを弄くれる高度な魔法使いという可能性もある。

奴のこれまでの能力（火を出す・地蔵になる・ハンマーを無限に投げる・Bダツシユ・マグマに落ちても死なない）を考えてみるとあり得そうで怖い

だがワガハイは諦めない民に柔らかなキノコを！ 緑を！ 与え我ら一族の繁栄を築くことこそ我が使命！

「ワガハイこそはカメのなかのカメ！ ワガハイがやらずに誰が成す！」

こうして今までとは一風変わったクツパは歩みを始めるのであった。



## ブラックキノコ王国

まず、さしあたっては食料だ。

人であれ亀であれ食べなければ生きていけない

水がなく、日光もない痩せた土地が広がる我が国では、成長に多量の水を必要とする菌類（キノコ）をすべての国民分与えることは不可能。

というよりもキノコが生えるような森がない。つまり我が国ではキノコが栽培できない

ゆえにキノコ王国から輸入したキノコのスープが国民の主食となってしまうのだ。

三食スープ、そして鉋毒や砂塵にまみれ有毒ガスがあらゆるところで湧き出るこの国では、子供の死亡率が異常に高い

（逆に言えば、『ある程度までの成長を卵という隔絶された空間で行える』我ら亀族だから生き残れたともいえるのかもしれない）

だがこちらには現代知識とゲーム知識がある

さっそくカメツクを呼び出すことにした

「陛下、何か御用でして」

「よくきた！頼みたいことがあるのだ！」

「何なりと！」

「クリボーを巨大化させた魔法があつたはずだが」

「は、はい。巨大化の魔法ですか」

「ああ、それでこれを巨大化させろ！」

ドンツとキノコを机にのせる

「……………陛下？キノコは戦力になりませんが」

それに対してカメツクは真面目な顔でそう言い放つたのだ。

「やはりか……………いいか！これは兵器なんかではない、食べるのだ」

意識が宿ってからおびただしい量の資料を読み返したのだが、ひとつおかしなところがあつたのだ。

それは技術の発展方向。明らかに軍事方面にしか技術が進んでいない。



原因はキノコ王国への移民、亡命等なのだが。

ゲーム中でノコノコはキノコ王国の首都に数人ぐらいしか見たことがない。

さらに言うならば家にノコノコがいない。

大量に見かけるとしたら農村や工場等、そして一部の技術者のみ

さらに言うならば、本来なら高度な技術を要求される蒸気機関車の機関士が、全てキノピオであることだ

蒸気機関車は我が国の産物であり、運用や整備等をキノピオが自然に理解できるはずがない。

指導や教育を行った亀族がいるはずなのだ。

彼等の足取りが全然わからない。

手紙も帰って来ず蒸発したのだ。

嫌な予感がしたため、ハツクン等により組織された諜報部隊に調査を命令した。

数日後

「まじか……………」

調査報告書を読みながらこめかみを押さえる。

そこには、知られざるキノコ王国の実態が書いていた。

まず、キノコ王国はピーチ姫を除く全ての役職がキノピオによって独占されている

さらに、キノピオ以外の他種族がそれを目指すことは許されておらず

キノピオのための政府

キノピオのための法律

キノピオのための権利

がまかり通っている。

そのため、キノピオが異常に優遇される社会が形成されている

そして、食料を求め飢えをしのぐためにかの国に渡った同胞を待っていたのは、地獄だった

村単位で集団農場に押し込まれ、嗜好品である茶葉のみを作らされ

る。しかも、死ぬまでだ。

(もちろん主食となるものは栽培させてくれない……つまり食糧を盾に強制的に働かされるのだ)

技術者も工場に監禁され、休みなく働かされる。

技術を教えているときは優遇されたのだが、キノピオが技術を習得すれば容赦なく捨てられる

難民という立場を利用され、法外な契約を交わし闇に消える者も多い

我が国との異常な貿易による利益、そして彼等のような奴隷からの搾取により、キノコ王国は栄華を極めていたのだ

人は怒り過ぎると一転冷静になり、表情がなくなる。それが今の我輩にあてはまるだろう。

『今すぐにもキノコ王国へ攻め入りたい』そのような気持ちが沸き上がるが、それを押さえる。

今はまだその時ではない、臥薪嘗胆の時なのだ

カメツクへ国境警備を強化するように命じ出来る限りこれ以上の被害が出ないようにするための方法を考えるのだった

半年後

クツパの政策が効果を発揮しはじめ、食糧の自給率が上昇しはじめた頃

キノコ王国某所

暗いラウンジの中にはスーツをきたキノピオ達が集まっていた。各々高級なワインをゆらし葉巻を嗜みながら何かを待っているようであった

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます」

やがて一人のキノピオが椅子に座る。

そして、ラウンジにいたキノピオ達はそちらを一斉に向いた。

「本日お集まりいただいたのは他でもありません、クツパ帝国についてです」

「そういえばまたクツパが何かしているようだな」

「この頃かの国との貿易額が減少している。このままでは利益が少なくなってしまうのではないか」

「ええ、こちらでも奴隷の数が少なくなって来ましてね」

「あなたもですか、流れてくる奴隷も減りましたからね」

「皆様お静かにしてください。それよりもこちらが入手した情報で報告しなければならぬことがあります」

「それは何だ!」

「食糧増産計画です! 奴ら我が国に頼らなくてもいいように独自に食糧を得ようとしているようなのです」

「それは困る!」

「我が商会の不利益だ!」

「軍としても困るぞ……」

「全く、野蛮な亀が余計な知恵をつけよって」

「ええ、皆様のおっしゃる通りです見過ごす訳にはいきません。なので全て壊してしましましょう」

「だがどうやって?」

「お飾りの姫を利用するのです。しばらく消えていただきましょう」

「なるほどクツパに拐われたと」

「それは大変だなあ、ははは」

### 数日後

一人のキノピオが道を急ぐ、国を救った英雄の元へ。

つぶらな瞳に一生懸命な手足……そして、拭いきれない悪意を携えて

## 悪魔の謀略

その報告を理解するには時間がかかった……いや、頭が真つ白になったと言った方がよいか

「我がキノコ王国臣民一同はピーチ姫の即刻返還と賠償金を求める。なお、応じない場合にはそれ相応の措置を取らしていただくよう」

思わず書類を持ってきたパタパタの前で無言で書類ごと机を叩き潰してしまった

甲羅に縮まり怯えるパタパタ、よくみると甲羅のしたに水溜まりが形成されている

「おいー」

「ひゃいひゃいひゃいひゃい」

「今すぐ全軍団長を呼べ、今すぐだ！」

「かかっつかしこまろあしたあああああああ」

いかんいかん、口調が荒くなってしまっているようだ。

パタパタが弾丸のごとき勢いで執務室を飛び出していくのを確認してから思案する。

ピーチ姫がさらわれた？

誰に？

あいにくだが我が国は改革の真つ最中であり、上層部及び末端の兵に至るまでそんな無駄なことをしている暇がないのだ

さらに、指揮系統の改善により指揮統一が進み、上級将校の負担軽減と各種族ごとに独立していた軍団の一部を統廃合し、混成部隊の設立（砂中奇襲歩兵であったチヨロプーを工兵へと配置転換・ほぼ全て部隊にパタパタ等の飛行種族の偵察兵を配置等）が行われた。

これにより各部隊の連携と情報の共有の効率がよくなり、さらに部隊がどこで何をしているのかが把握できるようになっておりそのよくな兆しすらなかった。

これにより我が軍における欠点の双頭である部隊の暴走と情報漏洩（マリオが壊せそうな壁や穴・暗号が漏れる）を防ぐ事ができるように……なつたと思いたいな

軍団を率いるような連中には徹底した指令の遵守と報告を命令しているし……忠誠心故の暴走とかやるなよマジで

当然ながらワガハイにも心当たりがまったくくないのだ

となると考えられるものは

この世界においてはきちんと謎の組織の態をとった連中の暗躍が考えられる。

ピーチ姫はワガハイ以外にもいろいろな組織に狙われており、

その種類は魔術師・蛮族・秘密結社・エイリアン……エトセトラと数えるだけで頭が痛むような連中がひしめきあっている。

まあ、ほとんどがすぐさま正体がばれてマリオのカチコミにあつて速攻で滅ぶが、例外として正体を隠した上でピーチ姫の誘拐を成功させる奴らがいる。

そういう奴らは優れた科学技術や魔術をあつかつたりしてめんどい上に初期には証拠や手掛かりをほぼ残さない

そうなつた場合にマリオがとりうる行動としては……怪しいと思つた勢力に突撃である（大抵はそのボスから情報が得られてストーリーが進む）

ワガハイ

→グサツ

ピーチ姫誘拐常連者

大魔王（笑）

なんか悪そう

とりまクツパボコレばおk

さらに先程の書状を組み合わせると





やエネルギーを盾に他国を脅迫する国家とかね

どうしようめっちゃヤバくね

キノピオ：穏やかな性格の種族

ぜってえ嘘だろ

「皆、よく集まってくれた。いきなりだが、本題に入ろうと思う。先程のキノコ王国よりピーチ姫返還を要求する書状が届いた」

「馬鹿な！」

「あり得ん！」

「何かの間違いだ！」

ざわざわ、ざわざわ

「静まれエエエエエエ!!……ウム、我もそうだがまったく心当たりがない。だが、万が一のこともあろう一応聞いておこう」

「ピーチ姫拐った奴いるか？」

「「「「(ブンツブンツブンツ)「「「」

「先祖に誓えるか！」

「「「「(コクコク)「「「」

「ならばワガハイに誓えるか！」

「「「「「ハイ!」「「「「」

「わかった、ではお前達を信じよう」

「クツパ様!では何者がやったのでしょうか?」

「わからん！」

「エエエエエエ!!」

「ただわかるのは、あの髭を撒いてピーチ姫をさらえるような連中がいる可能性がある」

「「「「……………」

「さらにな、ぐずぐずしているとマリオがカチコミかけてくかもしれん」

「「「「「!」「「「「」

「なので、我等が行うべきことは速やかに姫に城へと戻ってもらうこ

とだ！」

「「なるほど……」」

「でもどうやってやるんですか？」

「これだけの事態が起きているのだ、相手の目的が不明と言っても市場や経済に変化が起きるはず……そこから探る！」

「さらに今まで遭遇した組織の連中に接触して情報を引き出せ！その上で情報でもってキノコ王国と髭の疑惑を払拭する！」

「よいか！まさに我が帝国は危機に瀕しているのだ……総員一層の活躍を見せろ！」

「第一航空歩兵大隊、カラカラ砂漠へ向かいドロンチュ一家を捜索します！」

「第五装甲槌撃兵中隊、ゴロツキタウンのモンテファミリーの元へ向かいます」

「ハックン 諜報部隊、キノコ王国への潜入を継続し市場経済・噂の収集を強化！」

「第三連合飛行艦隊、キノコ王国周辺海域の警「クツパ様ああああああああああああ!!」なんだ！」

参謀本部が各部隊に指示を出していると箒にのった状態のカメツクが飛び込んできた

メガネは外れかけローブがずれて禿げ頭がみえかけている明らかに様子がおかしい彼は情報を伝えてくる。

「奴が、奴がきます！」

「早すぎる！外交官！」

「はい！」

「今すぐキノコ王国へ行け！」

「予備軍を召集しろ！防衛戦を行う！」

カンッ カンッ カンッ

「炉を温めろ！フライホイールを回せ！」

「錨を上げろ！出港準備！」

「航空歩兵の搭乗急げ！」

「出撃！陣形を鱗形陣に移行！目的地はジャンボル島沖」

「ジャイロコンパス起動！」

「面舵いっぱい！」

「ようそろおとおお」

軍港から多くの飛行戦艦が出撃していく同時に軍団が各地から召集されマリオの進行が予測される進路上の都市に避難命令が出される。

帝国歴×○△年クツパ帝国戦時体制に移行

キノコ王国某所

「ですから！我が国は今回の件には関係ありません」

「本当ですかねえー」

「証拠はあるのですかねえ」

「本当なんだ！」

「信じられませんねー」

「クツ」

「それで、此方としても早く姫を返して欲しいんですがねえ？」

「だから、いないといっているだろうが！」

「ふう、困りましたねえええ。これは調査しなくてはいけないですね」

「ええ、怪しい所を徹底的に調べないと！」

「調査隊を派遣しましょう！」

「貴様ら一体何を！」

「調査隊の保護のために軍を派遣しなくては行けませんねえ！」

「あなたの国は野蛮ですからねえ、拠点を作らなくてはいけませんねえ」

「……………貴様ら」

「ええ、わかっていますよ。なので早くしてくれませんかねええええええ!!」

「その通りですなええ!!」

「こんな事が許されるとも……………」

「はっはっ、日頃の行いのおかげですよ」

「亀とキノピオ。どちらの声を彼は信用しますかねえ」



## 進撃の髭悪魔

マリオ侵攻の報から一月ほどが経過した。

### 【砂の国】

キノコ王国から一つステージを挟んだ国。その国の海岸線では、多くのクツパ軍団に所属する兵士達が忙しそうに働いていた。

チヨロプーが塹壕を掘り、

その土をクリボー達が運び出し、

後ろではノコノコ達が木製のトゲや櫓を組み立てる。

海岸線は完全な要塞線へと変貌しており、マリオをここで食い止めるという意気込みがひしひしと感じられた。

マリオは孤軍である。

攻め込んでくるのは軍ではなく個――。そのために防衛線を構築しても一点で突破されれば防衛線は無意味になる。

たとえ後方を遮断しても補給という概念は奴に存在しない。

(ちなみにマリオにアイテムを供給するキノピオハウスは開戦直後に襲撃しており、ここではマリオ個人の食料等を指す)

かといって、マリオの後を追って軍勢を動かすとなれば奴の侵攻速度と突破力に対応できず、軍の再編成もままならない。

結果的に散兵のみがマリオと接敵するという悪循環に陥っていた。

だが、数回の戦闘とステージの陥落を通して奴の弱点が判明した。

マリオは復活していない。

仮にマリオを撃ち取ったとしても、しばらくすれば奴は再度侵攻し

てくる（ゾンビアタックに近いものだな）。だがその場では復活せず、死亡地点から数キロ離れた所に現れる。

そう、空間から奴がいきなり出てきたのだ。

肉片からの再構成ではなく、あたかもその場にいたかのようにいきなり出現した。

初めにそれを目撃したパタパタは、瞬きした瞬間そこにいたと証言している。

「な…何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何を見たのかわからなかった…。頭がどうにかなりそうだった…。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。」

これによって、奴の無限復活のからくりの一端がカメツクの学者達によって予測された。結論は魔法による空間跳躍。つまりはワープである。

マリオは致命的なダメージを負う瞬間に飛び上がり、別の空間へと侵入し安全な場所に出現して再度侵攻を繰り返すのではないかという仮説が提唱された。

そして、一つ実験が行われた。

マリオが侵攻している間に、奴の出現するエリアに大小の障害物を設置した。

もし仮にワープを行っているとすれば、ワープ地点に予測できない障害がある場合何らかのトラブルが起こるのではないか？という趣旨である。

（要するに石の中にある状態の誘発）

結果から述べると、奴の出現地点がさらに遠くへとずれた。

これはマリオの空間跳躍説を裏付けると共に、新たな疑問を生み出

した。

「奴はどうやって障害物に気づいたんだ？」

奴の出現の方法とその法則は未だに謎に包まれており、今回の事象はマリオ攻略の起点になり得る出来事であった。

マリオは不死身ではない。

その可能性が得られただけでも、今までの戦闘に意義が得られたのだ。

また、マリオは遠くまで飛べないし泳げない。

帽子に羽を生やして空を飛んだり、水中でコインを取ると体内の酸素分圧が回復するという意味のわからん生態を持つ奴だが、その反面長距離の移動は苦手ということがわかった。

その反面長距離の移動は苦手ということがわかった

これにより、ゲーム上の疑問の一つが解決した。

「なぜ、クッパは城を建てたのか？」

各ワールドにある城。

城とは防衛拠点としての能力はもちろんだが、兵士を収容して軍を維持し、そして砦周辺の領土の内政を行う拠点という側面を持つ。

だが、中身はほぼ罠やマグマだらけであり、とてもではないが拠点として機能しているとは思えない。

それが不可解であったが、城がすべてワールドの端。なおかつ次のワールドへの最短距離の地点に築城されていた事に気づいた時、これらの城が対マリオとしては実に合理的であると震撼した。

クッパは奴の侵入経路を見極めて必ず通らなくてはならない場所に軍ではなく、トラップだらけの要害を建てて奴に備えていたのだ。

これらの情報から奴に有効な戦略が考えられた。

前ワールドから一番近い海岸線に要塞線を設置し迎撃。

これが今のところ奴に一番刺さる戦略であった。

「マリオだ！マリオが来たぞ！」

空中で警戒にあたっていたパタパタが大声で叫ぶ。

号令があたりに響き、バタバタと兵士達が砲台や塹壕の配置につき固唾を飲んで待機する。

砂浜の向こう、飛沫をあげる波間にそれは見えた。

「パターン・ホワイト！ファイヤーマリオです!!」

同時に敵の情報が全軍に伝えられる。

「来るぞおおお!!」

その言葉の直後だった。

彼らが潜んでいた塹壕に高熱の火の玉が飛来し、圧倒的な熱量でその場に居たものを消し炭へと変える。

【Here we go!!】

「うあああああああつ!!」

マリオはジャンプやスライドを繰り返しながら変則的に動き、ノコノコやクリボー達が隠れていたトーチカにファイアボールを投げ込んでいく。

直撃を免れた幾人かが全身火だるまになって飛びだし、火を消そうともんどりがえるが、やがて真っ黒になり動かなくなる。

【Yahoo!!】

そのままの勢いでマリオは脅威的なジャンプ力で次の塹壕へと飛び込んでいく。

「貴様あああつ!!」

「よくも仲間をやったグベ……ッ」

塹壕の中に飛び込んできたマリオを倒すべくノコノコが飛びかかるが、それをマリオは躊躇なく頭から踏みつける。



そして

そして、あろうことかノコノコを敵の集団へと尋常ならざる脚力で蹴りこんだ。

強烈な速度で蹴り出されたノコノコは、皮肉にも彼の仲間を引き潰し、塹壕には無事な者はおらず誰もがうめき声をあげる。

その中をマリオは悠々と歩く。

「なんなんだよ！お前！いつたいなんなんだ!!」

まだ無事な者が震えながらそう叫ぶ。

【It's me Mario!】

そういつてマリオは走り出す。

「第一防衛ライン突破されました！」

「こちら被害甚大！」

「第二防衛ラインにマリオが侵入！」

「撃てー！撃って撃ちまくれー!!」

塹壕地帯から飛び出して来たマリオを待ち受けていたのはキラールの雨であった。

塹壕の出口に向かって十二門もの砲台からキラールが発射される。

マリオは断続的に撃たれるキラールに少し思案した後には飛び出す。

【Yahoo!!】

さすがのマリオと言えど、キラールの雨を走り抜けることはできずにキラールの内の一本が命中するが、それを無視して疾走する。

キラールをかわし、キラールを踏みつけて、やがて砲台へと到達する。

「この化け物がああ!!!」

キラールの周囲にいた兵士達が果敢に立ち向かう。

数分後――、

兵士達はもの言わぬ状態になり、  
もう一段階縮んだマリオが砲兵陣地から出てくる。

そしてさらに奥へと走り出す。

「「「「い〜くぞおおおおお!!」「」」」」

それを見て砲台周囲の塹壕にいたクリボー達が、ここぞとばかりに一斉に飛び出しマリオに突撃していく。

それからは酷い乱闘であった。

クリボーが踏みつけられ、体をひしやげている間に別のクリボーが背後を狙って突進する。

マリオはそれを察知してクリボーを踏んだ衝撃で斜めに飛び、接近してきたクリボーを踏みつけ、先のクリボーと同じ結末を辿らせる。

今度は両サイドからクリボーがタツクルを仕掛ける。

マリオは地面を蹴り空中へと退避する。

その時だった。

仲間のクリボーによって打ち上げられたクリボーの蹴りが、空中に  
おり回避ができないマリオを捉えようとした

その瞬間マリオは、まるで空に吸い込まれるように短く上昇し姿を  
消した――。

【M a m m a m i a !!】

そう言い残して。

「やつ…た?」

「やつ、やりやがった…!」

「「「「やったぞおおおおおおおおおお」」」」

あたり一面から歓声が沸き上がる。

周囲の兵士はお互いに抱き合い。マリオを撃退した本人は心未だ

ここにあらざると呆然としている。

マリオを撃退した本人は心未だここにあらざると呆然としている

——マリオの撃退——それは間違いなく偉業であった。

だが、マリオの恐ろしさはここから始まる。

「緊急警報！緊急警報！………第二波接近！奴が来るぞおおおおお  
お！」

要塞線は未だ突破されていない。

だが、それがいつまでも続かない事は、誰の目にも明らかであった。  
………

【クツパ城・同大本営】

同大本営

「うむ、やるしかないか……」

「陛下……」決断を。今はなんとか戦線は停滞していますが………いつ  
どうなるかわかりません」

「守つてばかりでは勝てません！」

そうなのだ、戦争は始めるよりも終わらせるほうが難しいとはよく  
いったものだ。

今まではマリオを撃退＝勝利という感じだったが

今まではマリオを撃退＝勝利という感じだったが、今回の戦争はこ  
ちらが仕掛けられたのだ。

勝利条件が不明に近い………いや、わかっている。

ピーチ姫を早く見つけてこの愚かな戦いを終わらせる。

これが唯一の方法であった。

だが、肝心のピーチ姫が見つからない。

というよりもピーチ姫がさらわれた形跡が全くないのだ。

あらゆる角度から情報を集め、分析し、思考してもペンペン草一株も出てこない。

それどころかピーチ姫がいなくなっただけからのほうが議会や経済の動きが活発化している傾向さえある。

いくつもの法案が恐ろしいスピードで議会を通過し、人知れず公布され。

戦争特需で武器や鉄鋼等の会社株が暴騰。

これが仮にも国家元首が行方不明の国か？

それに、叩けば叩くほどに影に企業の姿が見え隠れしてくる。

そして、先日パツクの一人が気になる情報入手した。

「マヨイ森に大量の物資が輸送されているだ。――いったいあの国で何が起こつてやがる……？」

やるしかないか……幸いにも戦線が集中しているおかげで軍に余裕はある。

このままだとじり貧なのはわかっている。

だけどなー、絶対泥沼になりそうなんだよなー。

目の前の卓上には一つの書類。

重要機密。

『キノコ王国侵攻作戦』

## 奴隷兵士とプロパガンダ

ジャンボル諸島近海 夜明け前

上空400メートル

普段ならば偵察の為に少数の戦艦が浮かんでいるのだが、その日は違った

今までに観測されたほどのない濃霧が発生。

その上に見たこともないような大きさの雲の塊が形成されているのだ。

当然の事ながら現地の観測所はてんやわんやの騒ぎを起こした。

本国への通信を行う者

計器の点検を行う者

上空の様子を眺める者

慌ただしくデータの計算を行う者

誰もが作業に没頭していた。

いや、してしまっただけと言った方がよいだろう

誰もがその雲の中を通過する無数の存在とその唯一の手がかりである大型回転機のわずかな駆動音を聞き逃してしまった。

「気づかれていないようだな……………」

「はい、提督」

「魔法部隊の様子はどうか？」

「今のところ問題はありません！」

「うむ、霧発生の魔法が切れないように注意しろ」

「は！」

「まさか、私がこのような大作戦の指揮をとることになろうとは……………」

そう呟きながら艦橋から辺りを見渡す。

そこには霧に隠れて輪郭のみしか視認できないが多くの艦影がお互いに一定の間隔を開けて飛行している。

「艦と艦との間隔に注意しろ！」

「はー！」

灯火制限をしているため艦橋の中は暗く、時折射し込む月光が唯一の光源であった。

その僅かな明かりで怪しげに光る蛍光が、開かれた羅針盤から漏れる。

「航海長！現在の当艦現在地は？」

「ジャンボル諸島水道を通過進路を西にとっています」

「うむ、予定通りか……」

今度は時計を取り出し確認すると自分の手が震えているのに気がついた。

それは上空の寒さによるものなのかそれとも緊張から来るのか自分にはわからなかった。

夜明けが近い

遠くの地平線に目を凝らせば僅かにしろずんではいる

「航空参謀！」

作戦の開始が近づきつつある

.....

キノコ王国首都キノコタウン

夜明けを迎え朝日がさつと射し込んでいく、多くの住民はまだ眠りについているが。

港の漁師達が活発に活動しており、丁度漁から帰ってきたであろう漁船で賑わっていた。

「なあ、ありやなんだ？」

「なんだいきなり」

魚を船から運びだそうとするキノピオが上の方を指差す  
つられて見れば空に黒い点々が見えた。

「鳥か何かだろ」

「それにしてもでかくないか?」

「ちよっと待ってろ」

やがて一人が望遠鏡をのぞきこむ。

ガタツ

そして手元から望遠鏡を落として呆然と立ち尽くした。

その異様な様子に周囲が肩を揺すってしっかりしろと言うように語りかける中でじつと空を見つめながらこうつぶやいた。

「クツパだ……クツパがきた!」

その言葉で一瞬にしてその場が氷ついた。

そして、数分後に一斉に動きだす。

あるものはあわてふためきその場をいったりきたりし、その他の者も頭を抑え怯えてその場に座りこむ。

やがて、その中でも勇敢な者達が非常時用の鐘を鳴らすべく走り出すが……時すでに遅し。

「#%#<%>%<%>%<%>% ( ) / 「」

彼らが鳴らそうとした鐘が木っ端微塵に吹き飛び、その残骸の上を編隊を組んだカメツク達が飛び去っていく

そして、彼らが飛んでいく方向からさらに多くの爆発音が響き始める。

危険を知らせるための鐘が、塔が、煙を上げて崩れさっていき、その後にはピーチ城の方向へと飛行していく。

「「姫様が!」」

いきなりの出来事に呆然となり立ちすくみ、しばらくしてから敬愛すべき姫の危機だと自覚する。

「どうする?..どうする?..」

「どうしよう……」

「とにかく城に向かわない……なんだ?」

クツパの襲撃である。

いつもならばマリオさんが向かってくれてクツパをやっつけてく







のにも関わらずだ。

「嫌な予感がするぞ……………」

そして、提督の予感は的中する事となる。

キノコ王国侵攻から数日が経過。

クツパ軍団は首都から周囲の集落や都市へと進出を開始しほぼ無抵抗で勢力範囲を広げていく。

だが、ある日を境に妙な報告が出始めた。

ノコノコが襲撃してきたのだ。

最初はキノコ王国側のノコノコ達だと思われたのだが、報告が増えるにつれて嫌な予感が雪だるま式に増えていく。

顔は痩せ焦げて身なりは貧相で、煤に汚れた甲羅はもはや色の識別も困難。

その上でしきりに我が軍団の反対、自陣を見返し恐怖の表情を浮かべ泣きながら走って来るのだ。

極めつけに軍団に突撃してきた者達を制圧して話を聞こうとする  
と周囲を巻き込んでノコノコが爆発したのだ。

これによって何の情報も得られず。さらに前線部隊の士気が著しく低下している。

某所

「なかなかよい案だったな」

「ええ、」

「奴隷を戦場に突撃させるとは思い切った考えだ」

「家族を人質に取れば簡単でしたよ」

「そうか、そうか、でそいつらは？」

「はい、あとぐされなく消しておきました」

「その上で怯えて帰ってきたやつは処刑、突撃したら爆死か………傑作だな！」

「少しもつたいない気がしますですがどうセクツパ軍団が来たらなくなるんです。資源の有効活用と思ってくればよいのです」

「資源か………言えておるの」

「彼らには我々が資産を回収する時間をかせいでいたただかないと行けませんから」

「笑いが止まらん」

「全くだ」

「難民となった国民からは金を巻き上げられるし」

「武器も売れに売れている」

「政府が無茶苦茶なおかげでいろいろできる」

「」「戦争は最高だな」「」

「それで、例の計画は？」

「滞りなく」

「そうか、下級国民達も本望だろうよ」

「ええ」

「」「愛する国のために死ぬるのだからな」「」

暗い一室の中に不気味な笑い声が響く、彼らの目はギラギラとひかり口元は薄い三日月のようになる。

数週後 キノコ王国ある町

町の広場にはこの地の住民のほとんどが集められており、皆侵攻してきたクツパ軍団の噂を聞いてみんな不安がっていた。

「クツパ軍団がもうすぐそこまで来ている！そのため他の町へと避難する事になった!!」

どこかから派遣されて来た兵士がそう言つて住民を急がせる。

あまりの急報に住民は慌てて準備をして兵士に誘導されて町から逃げていく。

他の町とは反対の方向へと。

「あのー兵士さん、私達どこに向かっているんですか?」

「行けばわかる」

「そうですか……でもだんだんとなんだか森深くなつてきていませんか?」

「……………」

「兵士さん?」

「……………」

「えっ!?どういうっ」

「お前のような勘のいい奴は嫌いだよ」

周りの兵士達の様子がおかしいことに気がついたキノピオだが言葉を最後まで発する事はなく切り伏せられた。

それを目撃した人々に恐怖が伝染していく。

「へっ兵士さん一体何をガツ」

「皆殺しだ!一人も逃がすな!」

おそる、おそる近寄つてきた住民が喉を貫かれ物言わぬ屍へと変わる。

同時に周りの全ての兵士が抜刀し近くの住民へと切りかかる。

「うわああああああ!!」

「にげろおおおおおおお」

「いやああああああああ!!」

それを見て住民達は道を外れて逃げ出そうとするが周囲の藪から

潜んでいた兵士達が現れて退路がたたれる。

周囲には悲鳴が響き、地面が赤く染まり濃厚な鉄が錆びた匂いが漂う。

数時間後、そこで動く者はだれもいなかった。

それから、数日後

全世界にあるニュースが発信された。

へクツパ軍団がキノコ王国で虐殺か？！

これが、詳細な写真と文書、そして情報源が明確だった事もあり大反響を巻き起こした。

マメーリア王国、クツパ帝国へ非難声明

同じくドルピック諸島政府、サラサランドなどからも非難声明が発信される。

そして、多くの国が貿易の停止を宣言した。

## 忠義と不死の軍勢

キノピオによるプロパガンダによりクツパ帝国は世界の敵となった。

周囲の国家から国交断絶をこちら側との協議を行う必要すらもないというように一方的に告げられ。

貿易や通信が死滅

外交官や現地にいた記者の追放や我が国に関係のないカメ系の種族への迫害が起こり初めたとの情報まで出てきている。

さらに、貿易が壊滅したことにより帝国で産出されないゴム等の一部戦略資源が不足し、軍団の整備や生産が滞りつつあった。

幸いな事に食料系への投資のおかげで品種改良されたカラカラの実や地下を利用したキノコの水耕栽培工場が稼働しており巨大化魔法も相まって余裕があり国家としては未だに余裕がある状態だ。

最後に戦況であるが………マリオに対する少数精鋭部隊の投入や起伏の激しい山岳地帯や洞窟での遅滞戦術、航空戦艦の総員離脱後の自沈作戦によりマリオの侵攻を抑え込むことに成功。

だが、クツパ帝国は世界の敵となった。  
これが意味する所は世界の中での孤立であり、すなわち政治工作が壊滅。

同盟や連合どころの話ではない、奴らのプロパガンダにより講和交渉や終戦交渉までならず会談を仲介してくれる第三国がいなくなっ  
てしまったのだ。

さらに、敵の正体がようやく判明したのだがそれが軍産複合体のよ  
うな存在であった。

通常ならば軍産複合体と言えども政治的影響力があるだけで直接的な権限を持っていないが現在のキノコ王国においては政府の腐敗  
がすさまじく、まさに売国奴の巣穴と化している。

このくそつたれな戦争も奴等が煽っているのだ。

憎しめ！争え！怨め！それらが我らの富となる。

戦争を起こして一番得をするのは誰か？。

答えは簡単、商人だ。

戦争はしよせん経済と経済のぶつかりあいであり主義や思想それらは後付けのスパイスに過ぎない。

領土を奪っても開発し運営するのは商人達だし賠償金等は戦時国債の支払いに当てられる。そしてそれを大量に保有するのも商人。

当然戦時は物質の消費が莫大になり利益が増える。

ここまでこれば、いかにウハウハであるかがわかるだろう。

彼らにとつては戦争を終わらせるなんてもつてのほか、むしろ優勢ならばいくらでも続けてほしいと望む。

だから、必死になって煽る。

いかに相手が醜悪で卑劣で下等であるかを訴えてそして執拗に自分たちが正義だと訴え。

人が死ねばそれだけ新たな需要が生まれ。

民衆の怒りは相手国民への非道への免罪符となり。

商人達の懐は盛り上がっていく。

たとえマリオを倒したとしても奴等は死滅しない。

政府と軍部の責任を追及すれども彼らは裁かれもしないし責任の追及さえもできないだろう。

もしくは一瞬で掌を返して自分達は哀れな被害者だと装い出すのがおちだろう。

奴等はゴキブリだ。叩いても叩いても無からわくかの如く出現するような存在。

もしもこの文明が滅びようとも最後まで生き延びてそうなたたかさとしぶとさとを兼ね備えた存在。

そんな奴等との戦争なのだ。

政府や軍部等は操り人形に過ぎずその裏側に見え隠れする闇が相手では本来の戦略では勝てない。

土俵が違う。

奴等は戦争なんぞで倒せる相手ではない。

「どうすればいいのだ………」

「クツパ様どうされましたか？」

「何でもない！で、戦況はどうなのだ？」

「やはり厳しいです。マリオの侵攻を抑えてはいますが完全には止め切れていません。」

「いつまでもつのだ？」

「………もって半年です」

「そうか」

「キノコ王国の方でもパルチザンの活動がはげしく捜索活動が難航しています」

「再統合した部隊を回せ」

「ですが！」

「くだい！今だからまだ可能なのだ………マリオが本国に到達するのを危惧して尻込みをすれば最後の希望すらなくなる」

「わかりました！」

「しばらく休む！後は任せました！」

「二」了解しました」二」

自室に戻り思索する。

やはり、マリオをなんとかしなければいけない………だがピーチ姫を見つけねば反撃のチャンスすらもない。

マリオが城に到達する。

それがどのような事かわかるだろうか？

クツパ城は城であり民衆の住居でもある。極寒のこの土地では適切な設備なしではカメ族はいきられない。

そのために都市を囲むように至るところにマグマを流して気温を上げてカメ族が生活しやすいような環境を作りその上で建物を建てて、それを防御するように城壁が築かれていき今の城ができている。

そこにマリオが突入してくるのだ。当然ながらマリオ側も亀族やクリボーの男女や子供の区別等はつかない。



そのために徹底的な虐殺が起こる。その上で遺体からコインやアイテムを持ち去り城内を蹂躪して回る。

宝物庫や食料庫のアイテムやコインも全部持ち去り持ちきれないものはその場ですべて捨てる。

後に残るのは避難していた大量の孤児や未亡人そして重症の働き手のみ。

そして、そこに笑顔のキノピオ達がやって来て全てを奪っていくわずかに残った物資を食料を働き手を……その状態のまま放置して本当に抵抗する力を奪った上で不平等な条約や契約を結びさらに搾取を行っていく。

なぜ我輩が処刑されないか疑問に思わなかっただろうか？ワガハインなんぞ自国に対して侵略を繰り返し返す軍事的挑発を行う独裁者だ。

そんな奴の首なんぞなん十回規模で飛んでなくてはおかしいのだが、自分がクツパになったからわかる。クツパは慕われ過ぎているのだ。ワガハイがいなくなればカメ族は、いや配下の者達全員が絶望する。

生きる希望すらも失いこの世に望みがなくなってしまう。

するとどうだろうかキノコどもは金の卵を生み出す亀を失う事になり儲けが少なくなる。

なのでワガハイが生かされているのはカメ族から永遠的に搾取するためなのだ。

「どうすればよいのだ………」

頭を抱える。ワガハイはしくじったのであろうか？

民を思い今まで行動してきた母親の腕の中でぐったりとする赤子を、腹をすかせて道の草を食べようとすると子供を無くそうとしただけだ。

なのに何故？何故このような仕打ちを受けるのだ！

今唯一の希望はピーチ姫のみ。

早く、早く見つけるのだ！そうしなければ……我輩達は終わりののだ。

クツパは何度も首をひねり資料を読みあさり何度も何度も思考する。

あらゆる方向からアプローチをいれども状況が好転するとは思えないのだ。

それでも諦めずに瞳を閉じて思案する。

だが良案はでてこない。

そして、突然糸が切れたように倒れて眠りにおちてしまう、連日の怒涛の激務と徹夜でクツパの体はもう限界を迎えていたのだ。

自分の独りごとさえも聞かれないように扉の前の衛兵すらも追い払っておりクツパの周囲には誰もいなかった。

「誰だ！我らノ王を悲しませるノは？」

「誇り高い我らノ王を悩ませタのは？」

「ダレだ！」

「二」優しシキクツパ様ヲ悲しませタノは！「二二」

それは、人に観測されない事象。

テレサではなく根本的にことなる存在達。

部屋の中に淡い光が集まり始め……それはやがてノコノコやトゲノコ、ハンマーブロスへと形創られていく。

一様にクツパを見つめ、あるものは嘆き。あるものは憤慨し。あるものは涙を流す。

そして皆に共通するところがあった。

決意をこめた瞳である。

それらはやがて四散しキラキラと光る残光を残して窓から飛び出していった。

この日から各地で異変が起き始めた。

かつての戦場で砦で城でカロンが起き上がり始めたのである。

彼等は言葉を話さず皆一点に向かって歩き始めた。

マリオのいる場所に。

## 絶対邪竜戦線

クツパが、これからの打開策をなんとか打ち出そうともがいている間にも状況は著しく変化していく。

占領下においているはずのキノコ王国では、クツパ軍団ではなくキノピオを狙った攻撃が立て続けて発生。

現地の憲兵隊が対応に追われている。

さらに、国家ぐるみではなければ動員できないような規模の謎の軍団がクツパ軍団の非支配地域で騒動を起こしており。

クツパ軍団の影響下へキノピオの避難民が列をなしてやって来ている事態にまで発展していた。

その中で両者共に言動の一部において違和感が目立つとの報告がなされ。

調査を行ってみると会話内容が所どころ噛みあっていない事が判明した。

それらの齟齬の中でも軍団が市民を救出したさいにあるキノピオの老婆が言った疑問が最たるものだろう。

「私の息子は元気なのでしょうか？」

聞けば息子がクツパに拐われたそうだ。

確かにクツパ軍団はキノピオを拐うこともある。

だが、それは副産物に過ぎないのだ。

大抵はピーチ姫の巻き添えをくらって城とか乗り物ごと拐われる。しかし、キノピオを単体で誘拐することなどめったにないし。第一

拐った所で何の役にたつというのだろうか。

クツパ軍団は国単位でカツカツの状態であり、わざわざただめしぐらいを増やす必要もない。

この時対応した兵士もおかしな話だなーと済ましていた…翌日に百人単位で誘拐被害者の家族が詰所に押し寄せてくるまでは。

異常である。

兵士は、あわてて国元の軍務局にカメックを介した魔法通信で問い合わせた。

かえってきた返事は。

「知らんぞそんなもん」

軍務局としても寝耳に水の状態であった。

キノピオをさらうといえど、話から相当な数のキノピオが拐われているのだ。

そうなれば当然の如く飛空艦や部隊が動くはず…なのにそのような記録が見つからないのだ。

また、クツパ帝国の台所事情によって記録などはかなり正確につけられており裏付けとしてしっかりと機能していたことによりさらに疑問が生じる。

接收した市役所で戸籍と情報を付き合わせて見る。

自分の顔色がどんどん悪くなっていくのがわかる。側にいた同僚も同じだったようでやがて室内を沈黙が支配するようになった。

年間千単位でキノピオが行方不明になっていた。

同時刻

ヨースターアイランド

ここヨースターアイランドは言わずとも知れたヨツシー達の本拠地。

クツパが何度も進行し撃退されたキノコ王国に次ぐ激戦地である。歴史は古く、クツパの先代の時代においても砦が築かれておりここが重要拠点の一つであることがうかがえる。

所でなぜこのヨースターアイランドが血で血を洗う激戦地区になったか疑問をていした者はいないだろうか？

実際の所、ここヨースターアイランドは地政学的にはほぼ意味のない地点であるのだ。

クツパ軍団は飛行戦艦を保有しており直接キノコ王国に行くことができる。

さらに言えば、ここヨースターアイランドはキノコ王国への航路から離れており補給基地としても不適。

すべてはこの島に住まうある生物が原因である。

ヨツシー

正式名称ヨツシードラゴン

凶悪なまでの生物としての頑丈さ、ある程度のダメージを負うと仮

死状態に移行する生存力。

鉄のような硬度でありながら伸縮性に優れた舌を振り回し爆裂する卵を投げつける。

水の上を走る。なんかホバリングする。逸脱した能力を持つこの生物だが、ここまではまだ良いほうであり。

多数の種族の寄り合い所帯であるクツパ軍団とはどうしてもわかりあえない特性があるのだ。

奴ら知的生命体を補食して繁殖するんだぜ。

あの愛くるしい姿に騙されてはいけない。

奴らは舌で臣民を舐めとり生きのまま補食しその亡骸から構成された卵を味方に投げつけてくるのだ。

そんな奴らを邪竜と言わず何と言えと。

このようにヨツシードラゴンはこの世界において屈指の危険生物であり。

クツパ軍団においては不倶戴天の敵に相当する。

そのため、ヨースターアイランドにはヨツシーを食い止めるための最前線基地として城塞がつくられている。

その城塞が今陥落しようとしていた。

「緊急！こちらヨースター要塞。襲撃を受けている！被害甚大なり。至急応援をうあああああううあうh s 6つつつつつつhガリボ



と蠢く。

ヨッシー！ヨッシー！とおぞましい鳴き声が響きあちこちでヌチャリと卵を産卵する音が聞こえてくる。

「もはやこれまでか・・・」

トゲノコエースが呟く。

「では、最後に奴らをできる限り巻き込んで散りますか？」

「ダメだ。」

呟きを聞いたノコノコが覚悟を決めた瞳で見つめてくるが即座に司令官はそれを否定する。

心情は理解できる。

というよりは自分もそうしたい。

だがそれは愚策に近い。

奴らの性質の上で半端な抵抗はほぼ無力。

むしろわざわざ餌を与えにいくほどバカなことはない。

その行為は奴らの増殖に手をかす事になり、やがては国本の家族・軍の同胞を危険にさらす事になる。

さらに言えば奴らの行動に餌の貯蓄。

つまり餌を巣穴に生きたまま生餌として保管する習性も存在し。

現段階での最良作戦、航空戦艦による絨毯爆撃の妨げにもなる。

「自決する・・・」

そう宣言すると共に周囲を見渡す。

そこには怯えと恐怖があった。



死への恐怖で震える部下をある時は優しく諭し。

正論を持って説得し。

約束を結び。

苦痛ができる限りないように自ら介錯を行う。

一人、また一人と命が消えて行き。

やがて最後の一人となった。

「覚悟はできています。」

「そうか」

最後に残ったのは自分に長く付き従ってくれた副官であった。彼には悲壮感などなく、覚悟を決めた澄んだ瞳をしていた。

「では、先に行かせていただきます。クツパ様万歳！クツパ帝国とその臣民に栄光があらんことを！」

そう叫び、部下は生き絶えた。

だが最後に自分に対して「申し訳ありません」と言ったのが聞こえた。

彼は気がついてしまったのだ。

最後の一人は自らの手で命を絶つことになる。

その覚悟はいかなることか、その痛み・苦しみがどれ程重い事かを。

最後まで苦勞をかけた。

司令官は今の行いを恥じてはいない、理由はいかにしても自分は

部下をこの手にかけたとしてもだ。

その心には。

奴らに対する最大限の抵抗を行ったという思いと共に、部下を生きのまま咀嚼されその血肉が同胞を傷つける事に利用されるのを防ぎ。

何よりあんな酷い死にかたを部下にさせずにすんだという思いがあった。

「クツパ様万歳！」

そう言つて司令官は自ら命を絶つた。

同時に撒かれたランプオイルに火を放ち周囲の亡骸を火に包む。

これで部下の亡骸が辱しめられることもないだろう。

かくしてヨースター島の島が陥落。

守備隊は全滅となつた。

それからすぐに砦からの救援要請によつて駆けつけた航空戦艦による爆撃が開始され。

ヨースター島が炎に包まれ多くのヨツシー達を行動不能に陥らせる事に成功する。

が、

その爆撃を生き延びたヨツシー達が餌を求めて海を渡り

クツパ帝国へと接近している事が同盟を組んでいる水生部族からの警告により発覚。

急遽ヨースター島方面の住民疎開が行われ、同時に義勇兵や退役軍人の召集が行われる。

各都市では住み慣れた街を離れ飛行戦艦で避難する市民の姿が見られた。

「お母さん…いつ帰ってこれるの？」

「大丈夫よ！きつとクツパ様が必ずなんとかしてくれるわ」

「本当？」

「ええ前にもこんな事があったの。でもクツパ様がすべて倒してしまっただから大丈夫」

臣民のために自身の叡智と力で邪竜のことごとくを封印せしめた魔王。

それがかわいそうだという理由で邪竜の封印を暴き。あまつさえその背中に騎乗し国へと侵攻する勇者。

魔王とは誰の事を指すのだろうか？

邪竜の侵攻によりパニックとなるクツパ帝国。

この騒動によってキノピオの行方不明事件などは有耶無耶となった。

だが、この2つの事件は繋がっていた。

クツパ帝国がこの事に気がつくのはもうしばらくしてからのお話。

なぜなら

「クウツクパ様つつつつつつつつ」

「どした、落ち着け？」

「ピiiiiiii」

「ピ?」

「ピーチ姫が亡命してきました?」

超特大の爆弾が投下されたからである。

隣人が化け物の皮を被された人間だった時の対処法

考えてみましょう。

まず、キノピオって何かしら。

キノコ王国の国民？そんなのはわかっているわ。

そもそも菌類なのに出産する事に疑問を持ったことはないかしら？

私が自我を確立した時、そこには両親の姿はなかった。そこにいたのは親代わりの爺やとその他有象無象だけ。皆が喜んでいたのを覚えている。

「どうして私とあなた達は姿が違うの？」

成長するにつれて次第に周囲と姿形が違っていることに気がつき周囲に聞いて回った。

「姫様ですから」

そしていつもそう返される。

それが当たり前だと思っていた。それが常識であり言うに及ばないことだと私は思っていた。

彼等に会うまでは。

マリオとルイージ。

はじめて彼等にあつた時、私ははじめて同胞にあつた事になる。

自分と同じような姿、キノピオとは違う姿を見て私はなぜか安心感を覚えた。

そして彼等との出会いを繰り返していくごとに私は気がついてしまった。

この国は滅んでいると。

キノピオ達は自我が薄い、ある一定の個体以外は感情に乏しくまるで一様に同じ行動を繰り返す。

キノピオの中には自主的な行動や新しいものを作り出すような個体がいるが、大多数のキノピオから見て彼等は異質に映る事が多い。また、年々その数も減っている。

ある時、キノピオに雷が当たりどういう事か骨が透けて見えた。キノピオには骨がある。

骨？

菌類に骨があるのかしら。

キノピオ達は私に象徴としてこの王国に君臨して欲しがっている。政務などには関わらせずただ笑いながら玉印をおす君主を欲しがっている。

なぜ？

だんだんと疑問は膨れ上がり私は試してしまった。  
キノピオの胞子とキノコの胞子を照合して見る。

一致してしまった。

日常にある物品と話している人物の構成要素が同じなのだ。つまり……。

出産して繁殖し会話やコミュニケーションをとれて。

骨があり、人形の存在を軸に菌糸で覆われたものがキノピオという存在である。

思わず悲鳴をあげかけた。

思い返せばいくらでも違和感がある。

キノピオ達は実は強い。マリオと同等の戦闘力を持ちいざとなれば機敏に動く。

では、そんな存在がなぜにクツパに由って一方的にやられるばかりなのか。

おそらく思考に制限がかけられているのだろう。

自分たちがよりふえやすいように臆病にし、より生き残らせようとしている。

もしくは宿主に自らを認識できないように思考が抑えられ無意識のうちに菌の誘導のもとで生きている。

生殖し、子宮のなかで菌に侵されて産まれた時から苗床として一生を終えるキノピオ。

では、なぜ私は存在している？

マリオは？ルイージは？

調べていくうちに驚くべき事がわかる。

菌糸に対して魔力が多いものほど耐性があつたのだ。

やがて、その傾向が自主的な行動を行うキノピオに多い事がわかる。

おそらく脳が侵食されきれずある程度の知能を持ったキノピオ達が存在する：気づかなければよかつた。

調べなければよかつた。

私は、私の存在理由に気がついてしまった。

ある学者が昔こう言った。

人という認識がある場合において、もしもその人物が人ではない何かになった場合。

自己を認識できなくなる。







数刻前。

「まあ、奴らは戦うしか脳がないですからな、どうせマリオに叩かれて這いつくばるのに健気なものですな」

「我らはただ待てばよいのです。さっしヤンパンでもいかが？」

「そうですね、またしばらくすれば元通り。庶民も蛮族も所詮は我らの道具、それらを適切に操って我らが豊かになるこれこそ至極真つ当なこと」

「「そうだ！・そうだ！」」

地下室奥深くではキノコ王国指導部がおのおの談話していた。

あるものは今後の野望を語り、次はもつと亀から絞りとつてやると息巻き。

他のものもそれに追従する。

そこに

「大変だ！・ここが感づかれた！」

「「なんだと！」」

「馬鹿な…そんな事があるはずがない？」

とキノピオ達は騒ぐが動こうとはしなかった。

ここで皆様は疑問を覚えるのではないであろうか？

何故こんな連中に今までいいようにやられていたのかと。

「頃合いか…」

騒ぐだけで何もしないキノピオを冷ややかな目で見つめる者達  
いた。

お互いに目配せを行い。

カチャリと室内に金属音が響く。

「なっ何を」

異変に気がついたキノピオ達が見つめるその先には、得体のしれな  
い物体を持ったキノピオ達がいた。

それはあまりにも異質であった。

グニヤリと曲がったフォルムそして謎に光る動力と思われる部品。  
見るものを無意識下で恐怖に落とし入れる何かがそこにはある。

「やれ」

パシユンそういう音が聞こえただけだった。

何もおこらないことに疑問をうかべるキノピオ達だが物体を向け  
られたもの一人に異変が起こる。

「あががあがあつ j d H d t f h ねおお l つ k s j g d h b z b う  
ぢえじえ j ねん s ん つ つ k d つ k d j d t y d k j h s g d g つ  
k つ つ つ つ つ つ l つ つ つ k つ つ l k」

もんどりうつかのように倒れそして奇声をあげながら暴れ始める。

目から血が流れそして苦痛な表情をしながらそれは動かなくなっ  
た。

そして、その死骸から緑色の液体でも気体でもない何かが浮き上が  
り、その物体へと吸い込まれていった。

「「「「ヒイイイ「「「「」」」」」

突然の仲間の死とその形相に残ったキノピオ達は逃げようとする  
が。

そもそもこの隠れ家に入入り口は一つしかない。

通常ならば頭のおかしな物件であるが、これはそうなるように設計  
されている。

彼等がそうしたのだ。

パシユンパシユンパシユンと閃光が響き壁際に死体が積み上がっ

ていく。

そして、一人だけが残される。

かしくもそれは議長を勤めていた固体だった。

恐怖に表情を浮かべる議長に彼等は近づくと、懐から針のようなものを取り出して議長に突き刺す。

議長が苦痛の声をあげるが、針が紫色に変化したことに気がついた彼等は喜色満面で頷き。

「待てーどこに連れていかれるんだ！止めろ行きたくない行きたくない行き…」

ガシリと議長の腕をつかみ引つ張っていく。

そして残った彼等は書類を燃やし始める。

その時だった。

突然キノピオ？の顔がベロリと剥がれかけたのだ。

あわてて彼等はそれを抑え元に戻し書類を燃やし始める。

そして、後始末が終わったのか彼等は忽然と部屋から姿を消した。

憲兵が突入して来るが後には何も残っていない。